
任侠の鰐

零

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

任侠の鰐

【NZコード】

N34990

【作者名】

零

【あらすじ】

前世の記憶を持つクロコ・D・アイルは、自身が前世で読んだ漫画『ONE PIECE』に登場するクロコダイルではないかとう疑念を抱く。日に日にクロコダイルに近付いていく様に、自分は「良い人になる!」と誓い、任侠海賊を目指すという奮闘記。

クロコダイル元女説がありますが、この話で主人公は男になつて

います。また原作とは離れていくかと思こます。

一・アイルとクロコ（前書き）

最近ONE PIECEを一気読みして、ちょっと書いてみたいな
あと思い投稿しました。少しでも楽しんでもらえたら嬉しいです。
主人公クロコ・D・アイルを少し紹介する話になっています。よろ
しくお願いします。

一・アイルといふ子

彼の名は『アイル』。クロコ・D・アイルである。

彼は現在5歳の、前世の記憶が残っている珍しい、しかし普通の人間である。前世の記憶があるため他よりほんの少し頭の良い、お得な感じで今の生を過ごして行くであろうお子様だ。

アイルは前世での自分の名前を思い出すことはできなかつたが、自分がかつてそれなりに楽しく過ごしてきたことはわかつた。両親がいて、友達がいて。實に幸せだつたのだと思う。

鏡の前に立つたアイルは、子供ながらに立派な悪人面だつた。それは彼自身の偏見があつてのこととも言えるが、ニヤリと笑えれば客観的にも断言できるほどには悪人面である。特に手入れをしているわけでもないが髪は黒く艶やかで、目は鋭い。中々整つた顔ではあるのだが…。

「何かクロコ・D・アイルっぽい…」

それは俺がクロコ・D・アイルだからだろうか、と彼は首を傾げる。もしかしたらここは記憶の中にあるONE PIECEの世界なんかと思ったが、他人の空似だと彼は思つことにした。

（そもそも俺があの超人達のいる世界で生き残れるわけがないじゃん）

鏡を見て溜息一つ。

とりあえず不測の事態に備えて体だけは鍛えようかなと思つ今日この頃。

「アイルくん、ミホークが来ているよ

アイルが滞在しているナナシ村の村長 ヤナメが彼を呼んでいる。彼は今ヤナメの家に居候させてもらつてているのだ。

それは一週間前のこと。アイルが意識を取り戻した時、彼は一人の老婆に手を引かれて暗い森の中を歩いていた。何故彼がそんな場所を歩いていたのか、記憶になかった。ただその老婆は、時折「大丈夫です。大丈夫ですよ、アイル様」と彼に声をかけ、終始周りに気を配つていた。アイルを何かから遠ざけようとしていたのだ。暗い森の中を必死に歩いて、そのまま森を抜けて、海岸につけてあつた小船に乗り そして小さな島へ着いた。

そこには小さな集落があり、アイルは村長に預けられた。彼を連れてきた老婆は村長と少し話して、すぐに元いた場所に戻つていった。だからろくな説明を受けなかつた彼はよく理解できぬまま、ここにいる。

ヤナメはアイルを受け入れ、家に置いている。村でも親切な人間だと評判のヤナメであるが、アイルは老婆とどういう繋がりがあるのかを気にしていた。

はーい、と元気に返事をしたアイルは、唯一の遊び相手である近所の子供の顔を思い浮かべた。それは弱冠2歳にしてすでに肉食獣を思わせる子供であったが、所詮子供は子供。いくら鷹のような目をしてるからといっても彼の剣には敵わない。前世の彼は短い人生の大半剣道をやつていたからである。

（ミホークつていつてもまさかあの鷹の田のことをじやないでしょ。
2歳だけど俺より弱いし）

彼の中で鷹の田のミホークは生まれて間もない赤子だらうと最強なのだと決まつてゐる。残念なことにそれに対しても良識的なツッコミをいれる者は誰ひとりいなかつた。

「アイル！」

小さな手に手作りの木刀を握つたミホークは、目をギラつかせてアイルを見ていた。黒髪の間から見える猛禽類に似た特徴的な目をした幼児は、妙な威圧感をもつてゐる。将来が心配だとアイルは思はざるを得ない。

「本当にミホークはアイルくんが氣に入つたんだなあ」

「ここに」と笑うヤナメは、アイルとミホークは本物の兄弟のようだと言つた。それをアイルが何となく嬉しいと感じるのは、彼がこの世界での確固たる絆を持つていいからだろう。
わずか一週間で弟と可愛がる存在ができたのは、彼にとつても非常にありがたい事だつた。

早く早くとせがむミホークの頭を、笑いながらアイルは撫でた。この村に来た翌日に、木刀で素振りをしている最中やつて来た子供がミホークであつた。ミホークは剣に興味を示し、教えてくれと以降アイルについて回つてゐるのだ。アイルにしても無表情ではあるが小さな子供が自分を追いかけてくる様子を可愛いと思つたから、少し剣の基本を教えようと思つたのだ。

「行つてきまーす」

笑顔でヤナメに手をふり、二人は砂浜に向かつた。

一・アイルとこつ子（後書き）

年齢が近いところもあり、ミホークさんを登場させてみました。出身地がわからなかつたので、村の名前はナナシ（＝名無し）村です。安易ですよね（笑）

クロコ・D・アイルの出生は、物語が進む中で出したいと思います。本人は記憶がないので特に気にしていませんが、子供にしては悪人面じやないかと顔について真剣に悩んでいます。そして自分がいる世界が前世で読んだ漫画『ONE PIECE』の世界であると確信は持っていますが、自分はクロコ・アイルではないはずだ！と今は思っています。

一・打ち上げられた宝箱（前書き）

さつそくアイルが悪魔の実を食べます。一・からすでに二年経過していますが、特に何事もなくのんびり修業の日々を送っていました。よろしくお願いします。

一・打ち上げられた宝箱

キン、と金属がぶつかり合つ音が響いた。

「中々やるね」

決して押し負けることはないが、気を抜けば一本取られることはわかつている。クロコ・D・アイルはにこやかに笑いながらも力を抜くことはなかつた。まだ年下のミホークに負けることはプライドが許さない。

「そういうアイルも」

ミホークは表情こそ変えることはなかつたが、ぐつと足に力を込めた。裸足のまま砂浜で刀を交えているため、足をとられないよう気を使わなければならぬ。とはいっても、この模擬戦は千回を越えているため慣れたものだ。

彼等が手にしている刀 逆刃刀は、模擬戦のために村の刀鍛冶に造つてもらつたものだ。

「アイル…何か流れできている」

視線を海の方にやつたミホークに、アイルもまた目を向けた。よくあんなに遠くの物を競り合いながら見付けたものだと感心する。一度距離をとり刀を鞘におさめながら、波に揺られる小さめの木箱を田で追つた。

「宝箱かな…?」

「あんなに小さな宝箱があるのか？」

「わかんない。ミホークとつてきてよ」

しかたがないと浅瀬まで流れきているそれを取りに行く。アイルはその様子をぼんやり見て、ミホークも大きくなつたなと思った。アイルは、ミホークが二歳の時から一緒にいるわけだが、日に日に成長していく様子を感じ、人間とはこうやって育つしていくのだと親の心境を味わつている。ミホークの親が出稼ぎに行つたきり戻つてこなくなつてから、もう三年が経つた。その生死はいまだにはつきりしない。

その間、ミホークにとつてアイルは親代わりであり、兄であり、友である。

「何だこの実は？」

箱を開け中身を取り出したミホークは首を傾げた。手にのせた変わつた模様の果実を、アイルに差し出す。

「…………もしや悪魔の実？」

似たような模様の実が記憶にあつた。

「悪魔の実？」

ミホークはその実を知らない。閉鎖的な島では会話に上がることがないのだ。

「海の悪魔の化身つて言われてて、食べたら一生力ナヅチになるけ

ど特殊な能力が身につくつていう不思議な実なんだよ

「特殊な能力?」

「食べてからのお楽しみかな?俺はこれが何の実か知らないし」

はははと笑つたアイルに悪魔の実を押し付け、ミホークは食べてみるを催促した。

「……一生力ナヅチになるつて俺やだよ。俺は刀と銃を極めるから食べなくていいし」

「愚問だな。銃はともかく最強の剣士になるのは俺だ。早く食べてみろ。特殊能力が何か気になる」

（実験体か俺は……まあこれがスナスナの実じやなかつたら俺はクロコダイルじやないつてわかるか。何にしても海に落ちなければ何とかなるよな…メリットの方が大きいはず…）

アイルはじいと実を観察してから、緊張した面持ちでそれを口にした。口の中いっぱいに苦みや渋さが広がつた。

「マズッ……おえつ」

「そんなにマズいのか。それで、結局どうなんだ?」

ぽろりと手から落ちた実をそのままに、自身の手を見つめる。口の中にまだ味が残つていて、涙目になる。水か何かで味を変えてしまいたいが、生憎手元に水分はない。

おえーっと舌を出せば、口からさりさり砂が落ちていく。口から砂

を吐くといつ漫画な表現を素でやってしまった。

「俺砂吐いた！？何で！？」

驚いたアイルは口を押さえ、慌てた。

「……まずは落ち着け」

静かなミホークの言葉に、アイルは深呼吸を繰り返した。落ち着け落ち着けと心の中で何度も唱え、冷静さを取り戻そうとする。

（人間が砂を吐くなんて絶対ないから！一気のせいだ！）

ふう、と息をはき、もう一度手を見つめた。

さうさうと指先が砂になっていく。慌ててもう片方の手で指を押さえ、戻れ戻れと念じる。

「……まさかのまさかで…砂人間？やつぱり砂を吐ける砂人間？まさかのまさかでやつぱりスナスナの実かよ？…ミホーク、ちょっと俺を殴ってみて」

「？」

よくわからないままミホークがアイルに殴りかかった。しかしその拳はアイルに衝撃を与えることはなく、体を通り抜けた。その部分は細かい砂となり、宙を舞つた。

「砂？」

「やつぱりそう見えるかな…」

「ああ。砂に見える」

「やつぱり砂なのか…」

アイルは号泣した。やはり自分はあのクロコダイルになるのかと。

「泣くほど嬉しいか?」

ミホークは、良かったなど無表情でアイルの肩を叩いた。

「違います…俺の未来を悲観してることなんですよー」

「その能力も極めれば使い物になるのだろう?悲観する必要はない」

そこではたと氣付く。スナスナの実は悪魔の実の中でも強力なロギア系であることに違いはないのだと。やり方によつては使えるのではないかと。

(……確かに正論だ。じゃあ俺はこの力を使って、良い人になればいいんだ)

前世の記憶にあるONE PIECEの登場人物であるクロコダイル。生糞の悪人を全力でいく(演じる?)クロコダイルに、アイルは良い印象がない。自分は善良な一市民だと思っている彼は、誰にも嫌われたくないしボコされたくない。

ぐつと拳を握つて、アイルは声高らかに宣言した。

「任侠海賊に俺はなる!」

それがアイルが考えた悪人化しないための道だ。海軍に入りたいとは思わない。正義を背負うにも、正義の定義が曖昧で背負う気にはならない。ただの一市民のままでいるのは何だか勿体ない気がする。海に出て世界を見てみたいと考えていたのは事実であるから、海賊の中でもピースメインの海賊になつて困っている人を助ける海賊になろうと思ったのだ。海には海賊が多く、多少の武装しなければ対抗できない。世界中を巡るには海賊となつた方が便利だらうと考えた。冒険家だと資金提供の後ろ盾が必要であり、自由さを重視するならば海賊の方が良いだらう。その分全ての責任を負わなければならぬが、そこはしかたがない。

「任侠？つまりはピースメインの海賊になるのか…。アイルが海賊になりたいとは知らなかつた」

「だつて今決めたもん。ミホークも一緒に来る？世界中を回つて剣士と勝負すれば？」

ミホークは少し考えて、それもいいなと呟いた。いすれにせよこの村からでなければ、剣士の頂点には立てない。どのような形で海に出ることになろうとも、ミホークは目標に近付けるのであれば構わないと思つてゐる。このアイルと共に行くのも面白そうだと小さく笑つた。

クロコ・D・アイル8歳。スナスナの実を食べて自身が原作のクロコダイルだという確信が高まり、任侠海賊になることを誓つ記念すべき年となつた。

二・打ち上げられた宝箱（後書き）

砂人間つて口から砂がはけそうですよね……。クロコダイルの顔（もちろん幼いですが）でそれをやつていたら面白いです。

それにも全く表情の変わらないミホークつて、子供らしくない（笑）どちらかというと性格的にはアイルが弟のようだと思いまし
た。きっとミホークは常に核心についてアイルを焦らせるはず。成長していくにつれ、ミホークは苦労人になっていきそうです……。

III・ロジャーといつ男（前書き）

一・で悪魔の実の話を出しましたが、一口田はまやくないと教えていただきました。申し訳ありません…。

さて、今回はせっかく生きてこるので『ホール・D・ロジャーを登場させました。今後何話かは想像によるロジャーさん達と話を進める」とこいつかと考えてこます。

三・ロジャーといふ男

それはアイルが航海術の勉強をしている時のこと。村中から借りてきた本を積み上げて、片つ端から読んでいる。

「アイルも外に出ろ！海賊だぞ！」

近所の住民がヤナメの家の縁側にいたアイルに声をかけた。アイルは顔を上げ、首を傾げる。まだ海賊の数は少なく、その海賊がナナシ村へ訪れる理由も特がない。ナナシ村はとても小さく、上陸する海賊など今までいなかつた。

「ヤナメさんも行つたの？」

「ああ。俺は先に行くからな」

急いで駆けていく隣人を見送り、アイルは読み掛けのページに栄を挟んで立ち上がる。腰に逆刃刀を佩き、唯一ナナシ村まで来る時に持つていた拳銃を右のピストルホルダーに突つ込む。村を襲つよつた海賊である場合、彼自身戦うつもりであった。

どんな海賊なのだろうと考えながら、アイルは人が集まっている海岸に向けて走り出した。

すぐに入だかりを見付け、その先頭にいるミホークに気付き前に出る。

目の前には一人の男が悠然と立つていて、村長であるヤナメに対しにこやかに話をしていた。

「…あの海賊はしづらーの島を拠点にしたいらしい」

一瞬アイルに目を遣りミホークは口を開いた。そうなのかと呟いた
アイルは、何故栄えているわけでもないこの小さな島をあえて拠点
にするのかと疑問を持つた。海賊がまだ少ないとはいえ、多くの者は
より神秘を、富を、強敵を求めるのだと彼は思っている。それに
欠けるナナシ村は、何もないからこそあまり目立たずに行動できる
とも言えるのだが…。

「俺はゴール・D・ロジャー。上陸の許可がもらえば、仲間に久
しぶりの土を踏ませてやりたい」

船長 ロジャーはそう言い、不安の色を隠せないナナシの村人に両
手をあげてみせた。

（もしかしなくとも後の海賊王？…後で話聞かなきや）

アイルが危険性はないだろうと構えていると、ロジャーは突如豪快
に笑い出した。

「どうかしましたか？」

ヤナメは不審そうにロジャーを見る。争う意思はないのだと言った
ために手をあげたと思ったたら、次は爆笑しだしたのだ。村人達は顔を
見合わせ、困惑しながら答えを待つ。彼等も直接海賊に会うのは数
える程しかなかつたし、どのように対応すればよいものかと悩んで
いた。

「いやあ…すまん。つい」

笑うのを堪えながら謝罪したロジャーは、大きく息をついてから真顔でアイルを見た。

「悪人面ではあるなと思ったんだが…今の笑い方は更に凶悪だな。将来が楽しみだ」

ぽんぽんとアイルの頭を撫でたロジャーは再び笑い出した。一方アイルはあまりのショックに地面に手をついて、やはりそう見えるのかと自身の顔を呪つた。少し笑つたつもりだったのに、そんなに凶悪そうに見えるとは…。初対面の相手に言われたとなると、純粋に外見だけのイメージで悪人っぽい、と思われることになる。第一印象は重要だ。…アイルはもう少し爽やかな人になりたいと心から願つた。

「アイル…落ち込むな」

ミホークは片膝をつき、アイルに語りかける。

「慰めてくれるのか友よ…」

涙ながらにミホークを見れば、彼は小さく首を横に振り、アイルに更なる衝撃を与えた。

「凶悪なのは元々わかつていたことだ。今更落ち込んでも意味がない」

「…………」

陰を背負い込んだアイルを励ましたのは、村人達であつた。

「ミホーク、そう言つてやるな。顔は置いといて、アイルは良い子だろ」

「そうよー弄りがいがあつて面白いでしょ？ショックを受けない範囲でにしないと泣いちゃうじゃない。もう泣いてるけど」

「皆わかつてゐるわ。アイルは悪い奴じゃないつて。あんまり気にするな」

それぞれがアイルに声をかけるが、面白がつてするのが大半で、フォローをしているのはごく僅か。

「ちくしょー…人事だと思つて…」

泣きながら言うアイルを生暖かい目で見つめながら、口々に頑張れよと言う村人に、アイルは深い溜息をついた。

「刀にも銃にも顔は関係ない。気にすることはない」

「あー…うん。ありがとーミホークくん。君はもっと表情筋を使つたらどうだい？」

「俺の分までアイルが使つているからいい」

ミホーク自身、感情表現が苦手なことは理解している。喜怒哀楽といった感情を表に出すことはほとんどないが、それを特に気にしたことはない。

そうですか、と呴いてアイルはいまだに笑っているロジャーを見た。目の前で繰り広げられた会話を聞きながらアイルを観察していたロジャーは、本当はそこまで悪人面ではないが、これはからかいがいがある子供だと笑っていた。

「……ヤナメさん、別に悪い人ではなさそうだから受け入れてあげてもいいんじゃないですか？」

もとよりロジャーの海賊団の危険性は低いと思つていたアイルはそう意見を述べた。ヤナメも彼の独特な雰囲気を悪くないものと思つていたため、頷く。

「……問題はなさそうだね。上陸を許可しますよ、船長さん」

アイルは村の中で信頼が厚い。前世の記憶を頼りに武器を改良し、耕作を見直し、村の子供達を集めて学校のまね事をしている。特に学び屋のないナナシ村ではアイルによる青空教室は高い評価をされていて、子供ではあるがアイルは大人から絶大な支持をされていた。ヤナメもその中の一人で、彼もそう考えるなら心配はないだろうと承諾したのだ。

ただその顔と性格のギャップから、よく弄られるのだが……。

「そうか。それは嬉しい。早速仲間に知らせてくる

ロジャーは礼を言い、笑顔を浮かべたまま一度船に引き返していった。

アイルにはロジャーが何を探しているのかはわからない。ただ彼が危険な人間ではないだろうとは思えた。それはロジャーの目が穏やかだったからそう思ったのかもしれない。

三・ロジャーといつ男（後書き）

そういえばナナシ村がどこに位置するのか書いていませんでしたね。
いつたいでこにあるんだろ？…。

海賊になると宣言はしたけれど、本物を見たことがないとなるとち
ょつとつまらないですよね。
ロジャーさんはいつ頃空島に行つたのでしょうか…大丈夫そうなら
その話も入れたいなあと思つます（笑）

四・船ネロイヌ（前書き）

一ヶ月ぶりでしょ？更新が遅くてすみません。あと、応援してくださった方！ありがとうございます！！

さて今回は海賊船にてアイルとミホークはよくわからない動物に遭遇する、という次回へ向けての話になります。よろしくお願いします。

四・船ネコイヌ

氣の良い海賊もいるものだと、ナナシの村人は思った。

酒を飲み交わしながら、海賊達は信じられないような冒險話を語り、世界はどれだけ広いのかを感じたまま話した。ほとんどがこの島周辺しか知らない村人は、面白い話を肴に酒を飲んだ。陽気な歌を口ずさみ、リズムを刻む楽器の音を耳に、夜は更に深くなつていく。

グラグラ揺れる焚火の炎はあたたかく、子供達はいつもなら早々に眠るのだが珍しく起きていた。

「子供は寝る時間だ」

ロジャーは酒を煽り、自分の周りにいる子供達に言った。不満そうな顔に、まだ暫く滞在するのだからいつでも話はできるだろつと解散を促した。

「イルだつたか…お前さんはいいのか？」

ロジャーの隣で、副船長であるシルバーズ・レイリーがイルに問い合わせた。自分のことを子供扱いしてくれたことに少しの感動を覚え、それからイルは小さく苦笑する。村では大人と同じ扱いを受ける彼は、まだ子供であったなど当たり前のことと思つた。

「じゃあ俺もそろそろ戻りますね

立ち上がり、おやすみなさいを口にする。それを引き留めるようつてロジャーは「ああ」と思い出したよつて言った。

「明日、少し海へ出る予定なんだが…お前も来るか？」

ロジャーの誘いにアイルは驚きながらも大きく頷いた。まさかロジャーが知り合つたばかりの自分を海に連れていくれようとするとは夢にも思わなかつたのだ。しかしそろくに海へ出たことがないアイルは、心から喜んだ。海賊になると言つたものの、実際に海賊が何をやつているのか見たことはない。一緒に海に出る海賊がかかる有名な「ゴール・D・ロジャー」の一昧とはかなり豪華である。日頃は全く信じていらない神というものにお礼を言いたいと思うほど、アイルのテンションは急浮上していた。

「昼頃に俺達の船に来い。お前の相棒も連れてな

相棒とはミホークのことであるとすぐにわかつた。ミホークもまた海賊になると言つてゐるため、海をちゃんと知るにはいい機会だとアイルは元氣に返事をした。

翌日。

「……アイル、寝不足か？」

ミホークは相変わらず無表情のまま首を傾げた。とはいえ鋭い鷹のような皿はざことなく心配そうに見え、アイルは大丈夫だと首を振る。

（興奮して寝れなかつたなんて恥ずかしくて言えないなあ…）

まるで遠足の前日に眠れない子供のようだと、そつと苦笑したアイルは、約束している場所 海賊船の停留している付近の砂浜を田指した。

陽気な海賊達は歌をうたいながら出航の準備に取り掛かっていた。その中の何人かがイルとミホークに気付き、手を振った。

「来たかボウズ共！」

「お前らの初航海は見る、晴天だぞ」

「ロジャーなら船なん中だ。そこから行けばいいからな

ロ々に声をかけられ、二人は律儀にあいさつを返しながら甲板に足をついた。船員達にすでに話は通してあるようだ。よろしくお願ひします、と心の中で呟いた。

子供の目線では全てが大きく見え、この大きな船をどうやって動かすのだろうと、興味津々だつた。紙の上ではない、本物の知識が必要となる。一定の大きさを超えない小さな船しか保有していないナンシ村では見ることのなかつたものが多くあり、これはどう使つているのかと聞きたくてしかたがない。

海の風が通り過ぎた。

悠然と波を見ていたロジャーが顔を上げ、船首の側で振り返る。

「更に…悪人面になつてる

「……ひどいです、ロジャーさん……」

肩を落とし、アイルはこめかみを押さえて咳いた。にやにやと面白いものを見つけた子供のように笑う男は、ブブツとわざとひじい声を漏らす。

（なんて…大人げのない人なんだ…）

「アイルは楽しみなことがあると寝れ……」

「うわあっ！余計な事は言わなくていいから…」

他人の秘密を暴露しないでくれとミホークの口を手で押さえれば、何のつもりだ？と射抜くような目で見られる。

「意外とお子様なんだな」

「…ほつといて下下さい」

アイルは深い溜息をつき、下を見た。ちょうどそこには取り外しが出来そうな 田を凝らさなければわからないくらい薄く線が浮き上がりしている 場所があり、気になつた彼はミホークから手を離ししゃがみこんでコンコンと叩いてみた。

「何があるのか？」

アイルの横から同じように覗き込むミホークは、首を傾げながら鞄の先で突いたみる。

「それは触らない方が良かつたのに…」

ポソリと呴いたロジヤーは喉の奥で笑い、そして食料を運び込んでいたレイリーに声をかける。

「レイリー、下がつた方がいいぞ」

「？…ああ」

子供達に憐れみの目をくれてやり、彼は少し離れて一人を見守ることにした。

一方アイルとミホークは、板を外してみようと思ったのだがこじ開けようとしても中々開かないため、ただ線が入っているだけで何も意味はないのだろうと考えた。

「あ」

突如ロジヤーが声を上げたため、アイルとミホークはそちらへ顔を向ける。

「どうかし…まつ…？」

どうかしましたか、と尋ねようとした言葉は勢いよく開けられた板で顔面を強打したことにより最後まで紡がれることはなかつた。

「…………」

「…………大丈夫かアイル」

ミホークは直撃を免れたため、顔の潰れた板は砂に変わったアイルの顔にめり込んでいるように見える。アイルに戸惑いを覚えつつ

声をかけた。

「…………ロジャーさん、そんなにヒーヒー笑わなくとも…。つか先に教えてくれてもいいじゃないですか」

ミホークに向けて一言大丈夫だと伝え、アイルは酸素不足になりながらも手を叩いて大爆笑中であるロジャーをジロリと睨む。レイリーはやれやれと肩を竦め、砂を元に戻すアイルの向こう、つまり外れた板の下から頭を覗かせている生き物を見た。三角の耳がピクピクと動いている、黒色の猫のよつななもの。それから先に荷物を運んでしまうかとそつと背を向けた。

「…………猫なのに猫じゃない…………？」

よく見れば胴体のちょいど真ん中で頭に向かって黒色、尻尾に向かって灰色にわかっている。黒色の部分については猫だが、下半身はまるで 犬のようで猫のしなやかさがなく、尻尾はふさふさしていた。

「何ダコノヤロ。ヤンノカ？」

小型犬ほどのサイズのそれが可愛らしく小首を傾げながら、抑揚なく言った。

「しゃべったな」

興味深そうに猫の顎を指で撫でてやるミホークに対し、「何ダコノヤロ。」と呟きながらも目を細めて「ぐぐぐ」と喉を鳴らしているのは、それが猫だからだろうか。

「これ、何ですか？」

「何トハ何ダコノヤロ。」

それの鋭い爪がアイルの砂の体を掻いた。

(凶暴な猫：？いや、犬：？)

「何ダコノヤロ。」

ガリガリと引っ掻くのは砂で、アイルには何の痛手もない。気にくわないのか、それは諦める事なく攻撃をしかけている。

「絶滅寸前のネコイヌだ。見たことないか？」

ネコイヌ…見たままだなとアイルは冷静にその生き物を眺めてみた。おそらくまだ子供なのだろう、幼さが残っている。

「知能が高い上にリバーシブルなんだ」

「…リバーシブル？」

おかしな単語が聞こえたので聞き返してみる。生き物にリバーシブルとかあるのか？と一瞬真面目に考えたが、まさかそんなことはないだろうと思った。

ロジャーはネコイヌに近付き、その背中に手を伸ばした。

ジジジジ…

(いやいや有り得ない音がするんだけど)

背中の毛に埋もれたチャック。ロジャーがジッパーを下げていくと、黒猫と灰犬の皮が 脱げた。

「！？」

「動物にはチャックがあるのか。初めて知った」

「違いますよミホークさん！そんなことはないと私は思いますよ！？」

「現にチャックはある」
「確かにあるけど……」

あらわれたのは金色の猫。ロジャーは手に持っているネコイヌの皮を、ネコイヌの口元へやり それをバクリと丸呑みした猫は、ゲフとゲップをして尻尾を揺らした。

「……食べましたね、自分の毛皮……」

「ネコイヌは脱いだ毛皮を食べてまた着るんだ。きかたは企業秘密らしいから俺も知らないけどな」

「へえ……飼つているんですか？」

「ポツキーは船ネコイヌだ」

「…………？あ、そうなんですか？」

ポツキーとはこのネコイヌの名前らしい。

（船ネコイヌって……家猫みたいなものかな？ととりあえず住み着いている感じなのかな……）

アイルがポツキーを観察していると、ポツキーはミホークの足元に擦り寄り、ぐるりと彼の周りを一周した。その姿は普通の猫のようである。

「何ダ殺スゾ。」

フーッと威嚇しながらポツキーはアイルを睨みつけた。

「…………え？」

「アイル、嫌われてるのか？」

ミホークは不思議そうに首を傾げる。

「俺何かしたかな？」

「やつぱつ……」

アイルの顔を見てロジヤーはこやりと笑う。

「いい奴かどうか」ロイツにはすぐにわかるんだろうな

そしてポツキーに手を伸ばした。

「俺、中身は悪人じゃな……」

「何ダコノヤロ。」

アイルの言葉を遮つて、ポッキーが鋭い爪でロジャーの手を引っ搔きながら言った。イテ…と手を引っ込めた彼は口を尖らせる。

「……ロジャーさんも嫌われてるんですね」

「違つ、偶然だ。虫の居所が悪かつただけだ」

「はーはー」

「ポッキーほらおいでー」

ロジャーが宝石をちらつかせてポッキーを呼べば、フラフラと近付いていく。ポッキーは光り物が好きだった。

(うわー…変な猫だなホント…)

アイルの隣で無表情にポッキーを田で追つているミホークは、何を考えているのかわからない（実際何も考えていない）。いつたい何をしにきたのだろうと疑問を感じたのだが、それに終止符を打てる人間がちょうど戻ってきた。付き合いきれず荷物を置きにいったレイリーである。アイルもミホークもいつ彼がいなくなつたのか全く気がつかなかつた。流石と言つべきか、彼等がまだまだ未熟だと語つべきか。

「ロジャー…いつまで遊んでいるつもりだ？ポッキーを連れて行くんだろ？」

「あー、わかつてゐる」

頭を搔いたロジャーは、海に手をやり風に手を細める。そして小さく「そりか」と零し、振り返った。

「30分後に船を出す」

「伝えてくる」

ロジャーの指示にレイリーは頷き、他の船員の方へ行つた。ポッキーはフンと鼻を鳴らし、元いた板の下へ入り器用に蓋をしめる。最初から何もなかつたようだ。

きっとロジャーがレイリーに下がるよついたのはポッキーが板を弾き飛ばすためぶつからないよう注意を促したのだろうなど何となく納得してみた。仲間を大切にするロジャーがはじめてかつこいいと思えたなんて本人には言えないなどアイルは思う。

船長らしげ顔つきになつたロジャーを、アイルとミホークはじつと見つめ、これから始まる冒険に胸を踊らせるのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3499o/>

任侠の鰐

2010年11月20日00時54分発行